大暮山の大黒舞（2）

お話 / 長岡清一郎さん（舞手）

〈変身〉

衣装に着がえる時や、化粧をしている時に、鏡の自分を見ていると、不思議なことに気持ちがだんだん大黒様になってくる。身支度が整うとすっかり大黒様になる。気持ちを切りかえる大切な時間となっている。

〈前口上〉

舞いの前に述べる前口上には、福を授ける十種類の祈願の言葉がある。

「あーっと来たりや皆々様に、明きの方から福大黒様が、どーさりと舞いこんだあー、さあーて、お大黒様というものは、一で俵をどんと踏んまえて、ニでにーこり笑うて、三で盃の大きいやつでごくごくと飲み干しまして、四つ世の中よいように、五つ泉が台所よりこんこんとわき出すように、 六つ無病息災で、七つ何事、悪事、災難、火災等には絶対に合わないように、八つ屋敷の悪魔をきれいさっぱりはーろうて、九つ米蔵、金蔵、七十五棟をどんと建てかえまして、十で当座の皆々様がまめで達者で働きますよう、どーっさりと祝ってまいろうー 」

あらゆる福を願って声を上げる。

〈大暮山の大黒舞〉

私の家でも古くから大黒様を祀っている。知らずに惹かれていたのかも知れないな。

大暮山地区でも昭和 30 年代頃まで大黒舞はあったと聞いている。小松又一さんや川口米男さんが若い頃に舞い手を務め、五、六人の集まりで門付けをして歩いたと聞いている。子供たちに教えていたとも聞くので、大暮山の大黒舞の歴史は古いのかも知れない。偶然、私が復活したことになった。

撮影/萩原尚季

〈舞いの指導〉

地元の人などに頼まれて、舞い方を教えた人もだいぶいらっしゃる。10 年前頃は職場で愛好会を作って楽しんでいた。その会員の皆さんは今でも私の応援に駆けつけてくれる。和合婦人会では、敬老会で披露したいと依頼を受け指導をさせていただいた。どんどん広まってみんなで盛り上げられたらいいと思っている。

〈やりがい〉

ご覧になった皆さんに喜んでいただけることがなによりのやりがい。お一人、お一人からお誉めの言葉や、感謝の言葉をかけて頂いたときの達成感、充実感はなんとも言えない味わいがある。また、主役の方を盛り上げ、なおかつ自分も盛り上がることができる。この上ない至福の時に感じる。

だから依頼があるたびに、最善の舞を出せるよう、事前に何度も練習を重ねている。いつも舞うたびに、上へ、上へ研鑽することを心がけている。これからも、もっともっと極めたい。

（2010 年 1 月取材　安藤竜二）

長岡清一郎（ながおか・せいいちろう）**氏**

昭和 34 年（1959）1 月生まれ。52 年日東ベスト株式会社に入社。
57 年より大黒舞を始める。朝日町大暮山在住。